

不夜城の十二時: 近世遊里における時間意識

ケンブリッジ大学

Angelika Koch

近世遊里が、周辺の都市における日常生活と離れた「遊び」の空間として認識されることは珍しくはない。当時の川柳がユーモアを込めて「世の中は暮れて廓は昼になり」と指摘したように、遊里の異質性は時間意識と生活のリズムの上にも反映されている。

本稿は三都の遊里における時間意識を論じる。遊里の異質性・非日常性の側面に目を向ける一方、周辺の都市文化や時刻制度の関連性も明確することを目的とする。特に、遊里を時間制による商売として分析し、近世の労働や商業の範囲では位置づけることに重点を置く。

1. 遊女の時間を買う: 料金表の分析

当時の遊女の「値段付け」という料金表を読み解いてみれば、遊里の取引は時間によるものであり、遊女を買う時には特異な時間単位があったことが明らかになる。遊興の料金は勿論遊客にとって関心の高い情報であり、そのために細見という遊里ガイドに欠くことができないものであり、1730年代から必ず記載されるようになった。細見というのは、遊女の揚げ代・名寄せ・遊女屋の地図など、遊客にとって様々な重要な情報を集めた遊里の案内書であり、江戸で十八世紀から定期的に刊行されるようになった。そのような刊行物の中では、どのような時間の単位が見られるのだろうか。

吉原細見の場合は、遊女のランク毎に値段を表記した形になった。最もトップクラスの上級遊女は（太夫、後は呼び出し）、「昼夜」という一日を通して、決まった値段でしか買えなかったが、それ以下の階級の女性は昼夜を通して、またはもっと短い時間帯として夜だけに限られた「夜仕舞」・「夜ばかり」という単位でも買われた。ⁱ

比較するために、『菊の園』という平賀源内著作の江戸男色細見の「堺町」の部分を取り上げたら、そこで前の吉原の例と同様に、「仕舞」、「片仕舞」という一日・半日の値段が表記されているが、その上に別の単位も登場する。つまり、「値段は昼六切、夜六切」という記載から、吉原と違って比較的短い時間の単位も存在したということが分かる。ⁱⁱ

その短い時間の単位は「切」、又は上方で「花」と呼ばれた。切の長さは決まっておらず、遊里によって差異が見られる。たとえば、前述の堺町は昼6切夜6切であったが、それに対して芳町という男色盛り場は昼4切夜4切になっていた。ⁱⁱⁱ その上、切の長さは同一の遊里・遊女屋内でも異なっている場合があり、一日を必ずしも等しく分割していたわけ

ではなかった。たとえば、日の出から正午まで、又は九つ時（つまり零時ごろ）から日の出までの時間は一切として売られることが多かったようである。iv 一切の値段は一定していたので、それで実際に同じ料金を払っても、手に入れる時間が長くなる場合もあった。朝と深夜は遊客が少なかったと考えられるので、それは遊女の料金を需要に対応させる方法だったのではないかということが推測できる。従って、切というのは、決まった長さの時間単位ではなく、単に商売の時間を細かい部分に「切った」、つまり分けた、ということの意味した。

大まかにいえば、当時の料金表には遊女を買う時間パターンが二つ存在している。一つは仕舞、片仕舞と言い、一日・半日を買切る比較的長い時間に該当するパターンであって、もう一つは切、花と言い、より短い時間を対象としたパターンになった。

2. 吉原の「昼」と「夜」

先ず、第一のより長いパターンを検討してみると、問題になるのは「昼夜」などの「昼」又は「夜」が遊里の環境ではどのような意味を持ち、どのように定義されていたのかということである。吉原の一日を例にとりながら、その点に焦点を当ててみる。

吉原の商売は普段正午ごろから始まった。その時、昼見世が開始され、つまり遊女が遊女屋の正面にある格子に出て、通り過ぎる遊客の視線にさらされて客を待った。昼見世は七つ時（つまり午後 4 時ごろ）に終わり、暮れ六つ（つまり日暮ごろ）からもっと人気のある夜見世の賑わいが始まった。v その時が、吉原の「昼」と「夜」を分割する境になって、だいたい日光と暗闇をわける自然の分割線にも該当した。

その黄昏時の夜見世は清搔^{すががき}という吉原ならではの三味線演奏で始まり、それを相図に遊女たちが格子に出た。その行事の進め方は決まっていた様で、先ず「見世出し鈴」と名付けて遊女屋の男が鈴を鳴らしたが、おそらくそれは遊女たちに集合を告げる遊女屋内の合図の音と考えられる。また、遊女屋以外の世界へ夜見世の始まりを知らせるためにも、音響的な手段を使用した（実は江戸の時報の多数も同様であったが）この場合は三味線演奏という遊里特異のメディアを選んだ。清搔の時、遊女の部屋も色々と準備し、そして吉原の夜の象徴となった行燈を点し、その光は夜見世が営業中であることを指す視覚に訴えるサインともなった。vi

夜見世の終了も音響的に、つまり拍子木を使って、郭中に知らせた。その際、吉原の唯一の出入り口であった大門を閉めて、泊まり客は郭中に居残った。その時を吉原の里言葉で引け四つと言ったが、名前と違って次の九つ時のことであった。何故かと言うと、遊女屋の経営者が夜見世を延長するために工夫をこらしたからである。従って、郭内の夜間時報に使用された拍子木は市内の時の鐘に合わせずに四つの拍子木を次ぎの九つ時に打った。

その結果、郭内では鐘四つと引け四つとを区別するようになった。これは、郭内と郭外の時報のギャップを表している。^{vii}

鐘というと、十七世紀から発展した江戸市内の時の鐘の制度を意味している。江戸後半になると、江戸の幾つかの場所に時の鐘が配置されていて、^{viii} その中に浅草の時の鐘が吉原から聞こえる程の距離にあった。吉原遊郭はよく別世界というイメージがあり、建築の上でも都市と離れた空間であったが、それにもかかわらず、吉原とその周りの都市では時間の信号が共通していたことが明らかになる。

それでも、夜番と番太郎という制度のため、それぞれの町には特に夜間の時報に関してはある程度裁量があり、それ故に時報が衝突する可能性もあったことが推測できる。夜番は、町の住人が月代わりに勤めるか、或いは番太郎という人を雇って町役を任せた。夜番は夜間定期的に町を廻って、火事を起こさぬよう注意を呼びかけ、治安を守り、その上で拍子木で時を知らせる役割もあった。

寛政 8 年（1796）の吉原遊女町規定証文という資料を見てみると、^{ix} 吉原遊郭の町としての組織が目につかび、よって夜番についても知ることができる。遊郭の閉門の時刻、番人の巡回などに関する定めが記載され、また町における夜番活動の自立性を読み取ることができる。遊郭の経営者がそのような権力を利用し、自分の利益のため時間を操って商売の時間を延長したと考えられる。すなわち、夜番の時報は正確さ・時間厳守を目的とせず、町の利益を確保する道具になったという印象を受ける。

さて、夜が明ける時、大門を開けて、^{きぬぎぬ}後朝の別れ、つまり遊客の帰る時刻になった。それにより、遊里での一日の商売が終わり、経営者が前日の勘定を行った。

このような一日の構造は吉原遊郭に準じるものであるが、吉原以外の遊里でも昼間の商売と夜間の商売を区別し、夜四つ時又は九つ時（つまり十時ごろから十二時ごろまで）引けの時間があり、似たような様子が見られる。^x

要するに、「昼夜」又は「夜ばかり」の仕舞・片仕舞の遊女買いは比較的長くて曖昧な時間であり、その境はほぼ自然の明暗サイクルと重なっていながらも、遊里特異の習慣・時報で告げられた。しかし、自然のパターンを基本としたので、このような場合には時間を計る必要はあまりなかったと考えらる。

3. 「花」が燃える間: 線香による時間計測

それに対して、「切」と言う第二の短い時間パターンは、自然に決められた時を元にしなかったもので、その長さを決めることが肝要になり、そのため線香を立てた。

香料は日本だけではなく、前近代の東アジア文化圏における時間計測において、大事な役割を果たしていた。^{xi} 香料の燃焼速度は一定しているのので、時間間隔を等しく計るのに相応しく、その上機械時計と比べても経費が安くついた。時間計測においては、抹香と線香と二つの香料を使用した。抹香の方は香盤という香時計に使われて、寺院などで時を知らせる道具として用いられていた。

それに対して、線香は遊里で主に利用されたことで有名であるが、実は別の環境でも計測方法として確認できる。例を挙げると、宗教的な環境では線香を立てて座禅の時間を決め、俳諧の句会では俳諧師が、線香が燃えている間に一句を作ることに挑み、江戸の自身番では夜番の交替時刻を線香で計ることがあり、そして医学の分野では膏薬を塗った後は、線香が一本燃えている間そのままおいておくべきだというような指示が見られる。

遊里の場合は、線香による時間計測を描いた図絵、又は線香時計自体も現存していて、それを根拠に当時の実態をある程度知ることができる。それによれば、上部を穴の形にくり抜いた箱形の線香台に線香を立てたようである。線香台に線香や道具を納める引き出し、又は遊女・陰間の名札が備えられている場合もあった。加えて注目すべきは、帳簿を置く台の機能もあったようであるが、それは燃えた線香の数から、遊女屋の売り上げをそこで記録していたことを示唆している。実は、線香台の図絵に帳簿と一緒に描かれていることがよくあり、そこからも線香で計った時間とそれに対応した金銭の価値との密接な関係が暗示されている。

上方ではその線香を「花」と言っており、遊女も芸者もそれを利用して遊興の一座を計った。^{xii} 線香一本が燃える間を花一本と呼んで、花代と言う遊女の揚げ代は花一本、二本、三本という形で、花に基づいて計算された。

前述したように、切又は上方の花も統一した長さではないが、線香なら長さが容易に変更可能になるため、異なった時間間隔に簡単に合わせることができた。

しかし、そのような臨機応変さが、会計管理の上では不便になったかもしれない。そのような可能性を暗示する史料としては、早稲田大学中御門家文庫に収められた明治3年の京都祇園遊女町の口達がある。^{xiii} この史料は、時間の単位や値段を統一することを目的としており、それまでばらばらだったやり方が取引の上で迷惑になると指摘されている(「近比銭売買に不同在之入払に迷惑」)。次いで、遊女・芸者に適用する一日の花数を詳しく記し、線香を立てる番人がそのまま毎朝花数を計算するように指示されている(「右通合線香を以明き迎之節紙券にて花数取極」)。最後に、その線香は遊女・茶屋の商社(つまり同業組合)から購入すべきであると付け加えている(「但し線香之義は当社にて可買求事」)。つまり、最終的には値段の統一が線香を規制することになり、商社が同一の線香を配布することによって経営者の一貫した商売活動を促そうとしていたことが見られる。

実際その施策の現実化に成功したかどうかは現時点で不明であるが、その史料が伝えているのは、線香で決めた花が帳簿の基本となったという点である。井伊家文庫に現存する安政 6・7 年（1859/1860 年）の京都傾城町における売上の報告書にも同様の状況が反映されている。遊女町約十カ所の記録では、商売の売り上げは第一に花数で表され、その後それに相当する料金が記載された。たとえば、祇園町と祇園新地における安政 6 年 11 月の売り上げは花およそ 32 万本で、それを料金に換算すると、739 貫ぐらいの金額に等しかった。^{xiv}

そのような史料が示しているのは、時間制による単位が遊女屋の経営者にとっても、商売の売り上げを計算する上で重要な役割を果たしていたということである。遊女商売の世界では、時間とその金銭的価値が明らかに結びついており、遊客を対象とした細見の料金表にも、経営に関する史料にも、根本的な前提として時間そのものに値段を付けることができるということが示されている。つまり、前近代的な「時は金なり」という考え方だと言っているであろう。

時間が直接金銭に換えられる価値があるというこのような考え方は、近世における労働や商売の範囲で完全に普及していた訳ではない。たとえば、三井越後屋の奉公人を研究した西坂靖氏によると、越後屋が時間を用いて手代の勤務評価をしていた一方、奉公人の給料は労働時間に相当した支払いとして見なされていなかったのである。^{xv} それに対し、遊里では時間を販売する商品とし、経営者の計算の単位とし、時間制による商売としての特徴が目立つ。そのような特徴は、時間に関する歴史の上でも研究を深めるに値するテーマであると言える。

4. おわりに

最後に、この研究が時間意識に関する歴史の上でどのような意義があるのかという点に言及したいと思う。時間の商品化というのは、普段近代化・産業化の時間意識における一つの特徴として論じられてきた。日本の近代的な時間意識は明治時代の文明開化や産業化を出発点とし、特に 1873 年の西暦と欧米の二十四時制度の導入にも結び付いている。「時は金なり」、遅刻、労働における時間に関わる規律などの概念は、19 世紀後半から西洋に倣い、文明開化の影響下で誕生した。^{xvi}

しかし、そのような近代的時間意識の発祥は、前近代の時間意識の空白の上で繰り広げられた訳ではなく、前近代の時間意識の構造はむしろ近代への転換に、ある程度道を開いた可能性もあり、その点はこの研究によって明らかになったと言える。Thomas Smith 氏による江戸時代後半の農業労働に関する研究においては、前近代の労働が時間に注意を払わず、只決まったタスクの完成を中心としていた「task-based work」という伝統的な考え

方を拒否し、その結果、明治時代の「工場時間」(factory time)は前近代の時間意識の消滅ではなく、却って新しい時代の要求に適応させたものと見るべきであるという議論を立てた。^{xvii} 近世遊里も同様に決まったタスクの完成ではなく、時間制による商売であった。確かに、近代以降の産業化における、機械時計の正確さに支配された時間意識と比べて、遊里では時間に対して異なった意味合いを持っていたということは疑いの余地がない。しかし、近世遊里という限られた環境で、時間が機械時計の普及を待たずに商品として扱われるようになったということは注目すべきだと考えられる。

ⁱ たとえば、嘉永五年の『吉原細見』を参照（電子版、早稲田大学古典総合データベース）。また、喜田川守貞『類聚近世風俗志：原名守貞漫稿』榎本書房、1927、p. 72

ⁱⁱ 平賀源内『菊の園』、早稲田大学古典総合データベース（電子版）、1764、「境町」

ⁱⁱⁱ 同書、「芳町」

^{iv} 同書、「湯島天神」。また、深川については、塚豊芥子『かくれ間』、国立国会図書館デジタルコレクション、「中町」を参照。京都の傾城町でも朝と深夜の時を安くする傾向が見られる。「花の枝折」新撰京都叢書刊行会編著『新撰京都叢書 9』、臨川書店、1987、pp. 95-101を参照

^v 「吉原大全」国書刊行会編『近世文藝叢書 10』、国書刊行会、1910-1912、p. 107

^{vi} 喜田川守貞『類聚近世風俗志：原名守貞漫稿』、p. 138

^{vi} 国書刊行会編『近世文藝叢書 10』、p. 101。また、江戸吉原叢刊行会編『江戸吉原叢刊 7』八木書店、2011、p. 207

^{vii} 国書刊行会編『近世文藝叢書 10』、p. 107

^{viii} 浦井 祥子『江戸の時刻と時の鐘』、岩田 書院、2002

^{ix} 『新吉原遊女町規定証文』早稲田大学古典総合データベース（電子版）、1796

^x 京都島原と大阪新町については、国書刊行会編『近世文藝叢書 10』、p. 403、p. 449を参照

^{xi} Bedini, Silvio A. *The Trail of Time. Time Measurement with Incense in East Asia*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994.

^{xii} 喜田川守貞『類聚近世風俗志：原名守貞漫稿』、p. 72、p. 75.

^{xiii} 「遊女・芸者花代ニ付口達」早稲田大学古典総合データベース（電子版）、1870

^{xiv} 東京大学史料編纂所編纂『大日本維新史料. 類纂之部. 井伊家史料』東京大学出版会、1959-、第23巻 pp. 269-276、第24巻、pp. 229-236

^{xv} 西坂 靖『三井越後屋奉公人の研究』、東京大学出版会、2006、pp. 197-242

^{xvi} 西本郁子『時間意識の近代：「時は金なり」の社会史』、法政大学出版局、2006

^{xvii} Smith, Thomas C. "Peasant Time and Factory Time in Japan." *Past & Present* 111 (1986): 165-197